その他

山田原欽「内藤家夫人命臣賦八景詩」訳注

鎌田 出*1

［はじめに］

貞享 4（1687）年長州藩三代藩主毛利吉就公の江戸入り（4 月 10 日）に先立ち、山田原欽は 4 月朔日に江戸に入る。8 月 25 日には内藤紀州牧の夫人にお目にかかり、詩作を命じられる。その後、9 月 2 日、11 月下旬にも詩作を命じられた。本詩は、この間、10 月中旬から 11 月下旬にかけて作られた。山田原欽としては 3 作目の「八景詩」となる[注1)]。

延宝 7（1679）年、原欽 14 歳の作である「瀟湘八景詩」は、実景に拠らない題詩である。続く貞享 2（1685）年作の「八江八景」詩は、前年に作られた「古畑別業記」[注2)] に見える如く、藩都萩の実景に基づく。3 作目である本詩は、眼前の眺望の中に「瀟湘八景」の八つの景物を創出する「八景詩」である。

なお、「八景詩」としての詩題は付されていないため、便宜上「内藤家夫人命臣賦八景詩」とする。

［凡例］

1．訳注作成に当たり、原文を除き全て新漢字表記とした。引用文も、日本語文献を含めて全て新漢字を用いた。ただし、「余・餘」など誤読の恐れのある場合、また、原文の趣を損なう場合には、必要に応じて旧字を用いた。
2．異体字は原則として全て新漢字に改め、必要に応じて注記を加えた。
3．誤字・誤用と思われるものは、訂正の上注記を加えた。
4．字音及び訓読は、原則として現代かなづかいとした。但し、和書の引用は原文の表記をそのまま踏襲した。
5．固有の名称を除き、年数、巻数等はすべてアラビア数字による表記とした。
6．訳注の構成は、①原文（ゴチック体）・書き下し文、②語釈、③現代語訳、の順とした。

①原文・書き下し文

内藤家夫人堂後有亭命臣賦八景詩

内藤家夫人堂後に亭有り、臣に命じて八景詩を賦せしむ[注3)]

②語釈

「内藤家」…棚倉藩 3 代藩主、従四位下豊前守内藤弐信（かずのぶ）。弐信は、延宝元（1673）年に棚倉藩 2 代藩主内藤信良の養子となり、同年、紀伊守に叙任される。延宝 2（1674）年に信良の致仕により家督を継ぎ、正徳 2（1712）年に大坂城代となり、従四位下に叙せられ豊前守となる。藤原氏秀郷流を嗣ぐため、藤原弐信ともいう。

「夫人」…長州藩 2 代藩主毛利綱広の二女品姫。吉就の姉。貞享 2（1685）年に紀伊守藤原弐信（1658～1730）に継室として嫁した（『寛政重訂諸家譜』巻 808）[注4)]。なお『増補訂正もりのしげり』（赤間関書店復刻 1969）は「弐」を「式」に作る。

「堂」…母屋。弐信の屋敷は、山王宮（日吉山王大権現社）の門前の通り（永田馬場）を南に突き当たった所にあった。東洋文庫所蔵の元禄 6（1693）年江戸佐藤四郎右衛門刊「江戸大絵図」（手彩色）[注5)] の同所には「内藤キイ」と記され、溜池にせり出した屋敷であったことが分かる。

山田原欽元禄 2（1689）年作「嘉会亭記」[注6)] には「凡そ虎門の右より、郭の外内、朱門甲第多く之に拠りて勝概と為す、而して内藤君の第、亦池の一方に在り」とある。

*1　至誠館大学　現代社会学部

「亭」…内藤邸内にあった四阿。

③現代語訳

内藤紀伊守の御継室である毛利品姫様のお住まいの母屋の後ろに四阿があり、わたくしめに八景詩を詠むよう命ぜられた。

①原文・書き下し文

小亭夜雨　小亭の夜雨

亭邊沙濕雨無聲　亭辺沙湿るも雨声無し

渺〃山川雲四生　渺〃たる山川に雲四生す

秉燭試尋前圃見　燭を秉り試みに前圃を尋ね見れば

暗芳不負愛花情　暗芳は花を愛するの情に負かず

②語釈

「小亭」…ちいさな四阿。

「雨無聲」…雨の音がしない。原欽瀟湘八景詩の「瀟湘夜雨」に「只だ湍響の風篁に接するを聞くのみ」、萩八景詩の「中津江夜雨」に「一夜簾を打つ声」とあり、聴覚に基づく描写が共通する。

「渺〃」…はるかに遠い様・果てしなく広がる様。畳語。

「四生」…四方に生じる。雲が四方に湧き出る様。

「試」…試しに～してみる。

「秉燭」…灯を手に持つ。「古詩十九首　其十五」（『文選』巻 29）に「昼の短かく夜の長きに苦しめば、何ぞ燭を秉りて遊ばざる」とある。

「圃」…庭園。

「暗芳」…暗闇の中に漂う香。花の姿は見えないが、香りによりその存在が確認できることを言う。

③現代語訳

小さな四阿あたりの砂は湿っているが、雨音は聞こえない、

どこまでも広がる山や川は、四方に雲がかかっている。

灯を手にして前庭に出てみると、

暗闇の中に漂う香が、花を愛でる心を裏切らない。

①原文・書き下し文

溜池秋月　溜池の秋月

武蔵秋來得月多　武蔵に秋来たれば月を得ること多し

塵収緑沼泛姮娥　塵収まり緑沼に姮娥泛ぶ

人間何處比清賞　人間何れの処にか清賞を比べん

一夜闌干俯玉河　一夜闌干として玉河に俯く

②語釈

「溜池」…現在の外堀通り沿いにあった沼池。赤坂見附交差点から山王日枝神社の南を通り、特許庁のあたりまで続いていた。

もとは慶長 11（1606）年に浅野行長が山王宮の麓に造成した人工湖で、神田・玉川上水の開通以前には江戸の上水として用いられていた。『江戸名所図会』（巻 3「天璣の部」）注 7) に、「溜池　赤坂御門の外より山王宮の麓を東南へ繞る。昔神田・玉川の両上水いまだ江城の御もとへ引かせ給はざりしその以前は、この池水を上水に用ひられしとなり。」とある。また、夙に景勝地としても知られていた。寛文 2（1662）年刊『江戸名所記』（巻 6「山王権現」）注8) に「承応三年回禄の後いまの溜池の築山無双の勝地」とある。

「武蔵」…旧国名。武州。ここでは江戸を言う。

「塵収」…砂ぼこりが収まる。人々が寝静まった静かな夜を言う。「塵」は「俗世間」を表す語でもあり、以下の「姮娥」が住む清浄な天上世界と対比を為す。

「姮娥」…月に住む女神。月を言う。『淮南鴻烈解』（巻 6「覧冥訓」）に「羿西王母に不死の薬を請う。恒（姮）娥竊かに以て月に奔る」とある。原欽の瀟湘八景詩「洞庭秋月」に「楼は明らかなり水面三更の月」、萩八景詩「玉江秋月」に「明月晴流に入る」とあり、共に水面に浮かぶ

月を詠む。

「沼」…周囲が曲がりくねった水たまり。溜池を指す。

「人間」…天上世界に対する人間世界。

「清賞」…美しい山水に遊ぶこと。蘇軾「初入廬山三首　其二」(『蘇東坡詩集』巻23) に「昔より清賞を懐かしみ、杳靄(ようあい)の間に神游す」とある。

「闌干」…斜めに傾く様。月が西の空に傾く様。金・史肅「宿睦村」(元好問編『中州集』巻5) に「闌干たる河漢已に西に傾く」とある。ここでは身体を傾けている様になぞらえる擬人表現。畳韻語「ランカン」。

「俯」…うつむく。溜池の水面に天空の月が映る様を、うつむいて寝ている様になぞらえる。

「玉河」…玉(ぎょく)のように美しく空に輝く天の川。『大漢和辞典』[注9] は、楊守陳「代老柳賦」の「落葉は玉河の清流に点じ、飛花は金毳(きんぜい)の上服を蠹(そこ)なう」を引いて「玉のやうに清らかな河。」とする。「秋月」を詠むのでここは「天河」、すなわち「天の川」を言い、溜池にたとえる。元・丁復「送廉公子北帰」(『桧亭集』巻8) に「江上行きて逢う瑤圃の樹、天辺帰りて泛ぶ玉河の槎(いかだ)」とある。

③現代語訳

武蔵の国は秋になると明月を見る機会が多い、
静かな夜が訪れ溜池の緑の水面には姮娥の住む月が浮かんでいる。
世の中にこの溜池での遊びに匹敵する場所などありはしない、
月は一晩中天の川のような溜池に身体を傾けて休んでいる。

①原文・書き下し文

葦間落雁　葦間の落雁
半沼秋深蘆葦多　半沼(はんしょう)秋深く蘆葦(ろい)多し
幾行鴈影落清波　幾行(いくこう)の雁か影清波に落つ
整翎莫敢追斜日　翎(はね)を整うるも敢えて斜日を追う莫(な)かれ
處〃風烟奈若何　処〃(しょしょ)の風烟若(なんじ)を奈何(いかん)せん

②語釈

「落雁」…舞い降りた雁。候鳥の雁は、秋になると北から南に渡ってくる。

「葦間」…溜池の葦原。「間」は、一定の広がりを持った空間。

「半沼」…溜池の半分。前出「沼」参照。

「蘆葦」…水辺のあし・よし。「よし」は「あし」の異名。

「幾行」…いくつもの群。列をなして空を渡る雁を「雁行」と言う。原欽瀟湘八景詩「平沙落雁」に「孤渚幾行ぞ関北の雁」とある。

「影」…水面に映る雁の姿。

「清波」…清らかな波。曹植「公燕詩」(『文選』巻20) に「潜魚は清波に躍り、好鳥は高枝に鳴く」とある。

「整翎」…羽繕いをする。

「斜日」…傾いた太陽。夕日。

「処〃」…いたるところ。畳語。

「風烟」…風にたなびく靄(もや)。唐・盧照鄰「初夏日幽荘」(『全唐詩』巻42) に「林壑(りんがく)に人事少なく、風煙に鳥路長し」とある。「烟」は「煙」の異体字。

「奈若何」…おまえをどうすることもできない。『史記』(巻7「項羽本紀」) に載せる項羽の歌に「虞(ぐ)や虞や　若を奈何せん」とある。

③現代語訳

秋も深まり溜池の半ばは葦におおわれ、
いくつもの雁の群れが清らかな波の上に姿を映している。
羽繕いが終わっても沈む夕日を追いかけようとはするな、
一面風にたなびくもやで、おまえをどうしてやることもできない。

①原文・書き下し文

高臺夕照　高台の夕照

微陽冉〃下晴流　微陽冉〃として晴流を下る

一半高臺照未収　一半の高台照未だ収まらず

籍得叢梢薜蘿色　籍き得たり叢梢薜蘿の色

錯疑霞錦掛高秋　錯りて疑す霞錦の高秋に掛かるかと

②語釈

「高臺」…高いうてな。内藤紀伊守の屋敷を言う。左思「呉都賦」（『文選』巻 5）に「姑蘇の高台を造り、四遠に臨みて特に建つ」とある。

「微陽」…かすかな太陽の光。夕日を言う。

「冉〃」…だんだんと。『楚辞』（「離騒」）に「老の冉〃として将に至らんとす」とある。畳語。

「晴流」…雨上がりの川。山王宮を繞る溜池を川に見立てる。原欽萩八景詩「玉江秋月」に「明月晴流に入る」とある。

「一半～未収」…高台の半分が夕日に彩られている様。原欽萩八景詩「鶴江夕照」に「一半の鶴江紅なり」とあるのに通じる。

「籍得」…「籍」は「藉・席」に通じ、（敷物を）しく。「得」は、動詞の後に置き動作の完了を表す助詞。夕日の紅色が、あたり一面を染め尽くす様。

「叢梢」…くさむらと梢。次の「薜蘿」と合わせて、一面の草木を言う。

「薜蘿」…かずら。つる草の総称。

「錯疑」…間違えて～かと疑う。夕霞を錦と見間違うことを言う。

「霞錦」…夕日のような紅色の錦。「霞」は、朦朧とした「かすみ」ではなく、日の出や日没前後に空が赤く染まる現象のこと。一面夕日に赤く染まる景色を、紅色の錦と見間違えたのである。

「高秋」…秋のたけなわ。南朝梁・何遜「贈族人秣陵兄弟」（『先秦漢魏晋南北朝詩』梁詩巻 8）注10）に「蕭索たり高秋の暮れ、砧杵四隣に鳴る」とある。

③現代語訳

夕日のかすかな光が雨上がりの水面をだんだんと下ってゆく、

紀伊守様の御屋敷はまだ半分が夕日に照らし出されている。

あたり一面の草木やつる草は夕日に染め尽くされ、秋のたけなわを飾る紅色の錦かと見間違えた。

①原文・書き下し文

海上帰帆　海上の帰帆

杳〃波天一線分　杳〃たる波天一線分かる

小楼凭檻日将曛　小楼檻に凭れば日将に曛れんとす

高風急送孤帆影　高風急ぎ送る孤帆の影

遠目直穿外国雲　遠目すれば直に穿つ外国の雲

②語釈

「海上」…内藤邸から見える芝浦沖の海。江戸湾。「嘉会亭記」に、「遠く瞰れば則ち芝浦の外、風帆浪舶俄頃に波天杳靄の際に出没す」とある。

「杳〃」…はるかに遠い様。畳語。

「一線分」…一本の線となって分かれている。空と海の境界線を言う。頼山陽「泊天草洋」（『山陽詩鈔』巻 4）に「水天髣髴青一髪」とあるのも同趣。

「小楼」…小さな楼。「楼」は、二階建て以上の建物。

「曛」…日が暮れる。李白「送崔度還呉」（『李太白文集』巻 15）に「去影忽として見えず、躊躇して日将に曛れんとす」とある。

「高風」…空の高い所を吹く強風。「高」は、遠景を眺める場合の視線の高さも表す。

「直」…驚きや意外感を表す副詞。意外にも。

「穿」…通り抜ける。雲の間を抜けて先まで見通せることを言う。

「外国」…外つ国。畿内以外の土地。ここは江戸を

言う。

③現代語訳

はるかかなたで空と海とが一本の線となって分かれ、
小楼の手すりに寄りかかると今にも日が暮れようとしている。
強風に吹き送られて港に戻る一艘の帆掛け船、
遠くに目をやれば外つ国の雲の先まで見通せる。

①原文・書き下し文

愛宕晴嵐　愛宕の晴嵐
水南嶺北幾千株　水は南嶺は北に幾千株
欝〃嵐光帯半湖　鬱〃たる嵐光半湖を帯ぶ
危磴迢〃無覓處　危磴迢〃として覓むる処無し
閑憐山鳥失歸途　閑かに憐れむ山鳥の帰途を失うを

②語釈

「愛宕」…愛宕山権現。現在の愛宕神社。社伝に拠れば、慶長 8（1603）年に創始という。[注11] 自然の地形として二十三区内で最も高く、眺望に優れていた。『江戸名所図会』（巻 1「天樞之部」）に、「見落せば三条九陌の万戸千門は、甍をつらねて所せく、海水は渺焉とひらけて、千里の風光を貯へ、尤も美景の地なり。」とある。

「晴嵐」…晴れた日に、山間にかかる靄。

「水南」…愛宕山の南に広がる海。江戸湾。

「嶺北」…海に対して北に位置する愛宕山。内藤邸からの眺望において、南に広がる海に対して、愛宕山は海の北（正確には、北西）に位置していた。

「幾千株」…何千株もの木々。『江戸名所図会』（巻 1「天樞之部」）に「山頂は松柏鬱茂し」とある。

「欝〃」…濃密な様。畳語。

「嵐光」…前出「晴嵐」に日光が射し輝いて見える様。孟貫「山中圧日」（『全唐詩』巻 758）に「深山宜しく暑を避けるべし、門戸嵐光に映ず」とある。

「帯半湖」…「帯」は、帯の様にめぐりかこむ。「半湖」は、溜池の南岸部分を言う。元禄 2（1689）年相模屋太兵衛版「江戸図鑑綱目」[注12]に拠れば、内藤邸から見た愛宕山は、溜池南東岸の中央あたりに位置しており、愛宕山を囲んで見えることで「帯」と表現したのであろう。

「危磴」…そそり立つ石段。「危」は、けわしく聳え立つ様。原欽「古畑別業記」[注13] に、「危石光を弘法の嶼に交ゆ」とある。愛宕山権現社の石段の険しさは今日でもよく知られており、『江戸名所図会』には「六十八級の石階は、畳々として雲を挿むが如く聳然たり」とある。「江戸図鑑綱目」の愛宕山には「石階八十三」と記されている。

「迢〃」…はるかな様。畳語。

「無覓處」…行方がわからない。晴嵐に遮られて、石階がどこまで続くのか見えない様。白居易「大林寺桃花」（『全唐詩』巻 65）に「長く恨む春帰りて覓むる処無きを、知らず転じて此の中に来たり入らんとは」とある。

「憐」…いとおしく思う。

「失帰途」…夕暮れになり塒に戻ろうとして帰り道を失う。陶淵明「帰鳥　三章」（『先秦漢魏晋南北朝詩』晋詩巻 16）に「雲に遇えば頡頏し、相鳴きて帰る」とある。

③現代語訳

南には海、その北の愛宕山には何千本もの木々が茂り、
夕日に輝く深いもやが溜池の半分を帯のように囲んでいる。
何処までも続く石段は終わりが見えず、
帰る塒が分からずさまよう山鳥たちを静かにいとおしむ。

①原文・書き下し文

青松晩鐘　青松の晩鐘

鐘聲何自度前灣　鐘声何に自りて前湾に度るか
送盡羣鴉烟嶂閑　群鴉を送り尽くして烟嶂閑たり
落日招提不知處　落日の招提処を知らず
山風蕭洒一僧還　山風蕭洒として一僧還る

②語釈

「青松」…曹洞宗万年山青松寺。文明 8（1476）年に太田道灌が創建し、慶長 5（1600）年に麹町貝塚より現在の港区愛宕に移転した。『芝区誌』に拠れば、「昔時、寺地の後方には含海山が峙立ち、前面には櫻川の清流が流れ、其眺望は絶佳であつた。」注14)。青松寺は、愛宕神社の南側に隣接する。

「何自」…何によって～か。「何由・何因」に同じ。平仄上の必要性から平声の「由・因」ではなく仄声の「自」を用いる。『史記』（巻 101「張釈之馮唐列伝第 2」）に「父老何に自りて郎と為るか、家安くに在るか」とある。

「度」…響き渡る。「度」は「渡」に通じる。原欽瀟湘八景詩「烟寺晩鐘」に「風は疎鐘を送り竹渓を度り」、萩八景詩「小松江晩鐘」に「深寺疎鐘度る」とある。

「前湾」…内藤邸の前に広がる湾。溜池を指す。

「烟嶂」…靄に煙る山並み。「嶂」は、屏風のようにそびえる山並み。

「招提」…寺院。四方から僧侶の集まる場所を言う梵語「四方」の意訳。原欽瀟湘八景詩「烟寺暮鐘」に「松烟は遮却す一招提」とある。

「不知処」…青松寺が何処にあるのかわからない。『唐詩選』に載せる唐・賈島「尋隠者不遇」（『全唐詩』巻 574）に「只だ此の山中に在るも、雲深くして処を知らず」とある。

「蕭洒」…夕暮れ時の涼しさ。「晩鐘」との関りから、脱俗的な雰囲気も表す。双声語「ショウシャ」。

「一僧還」…白居易「霊巌寺」（『全唐詩』巻 462）に「百花深き処一僧帰る」とあるのを踏まえるか。

③現代語訳

鐘の音はどうして前の湾に響き渡るのか、
その音が鴉たちを塒に送り尽くすと、もやに煙る山並みは静寂に包まれる。
日が落ちて青松寺の場所はわからないが、
涼しい山風の中を一人の僧が寺にかえってゆく。

①原文・書き下し文

前坡暮雪　前坡の暮雪
獨樹舞風難自休　独樹風に舞い自ら休むこと難し
征人去馬路悠〃　征人去馬路悠〃たり
高軒別賞瓊瑤觀　高軒の別賞瓊瑤の観
曽識前坡冒雪不　曽て前坡の雪に冒さるるを識るや不や

②語釈

「前坡」…内藤邸の前にある溜池の土手・堤。

「征人」…旅人。八景詩「暮雪」においては、夕暮れ時の旅人や馬が描かれることが多い。原欽萩八景詩「桜江暮雪」に「晩来舟子行人を訝う」、瀟湘八景詩「江天暮雪」に「銀界茫然として馬に上りて帰る」とある。

「去馬」…道ゆく馬。杜甫「秋雨歎三首　其二」（仇兆鰲『杜詩詳注』巻 3）に「去馬来牛復た辨ぜず」とある。

「悠〃」…はるかに続く様。畳語。

「高軒」…高い軒をもった広い屋敷。内藤邸を言う。左思「蜀都賦」（『文選』巻 4）に「高軒を開き以て山に臨む」とあり、李善注に『淮南子』を引いて「高軒、堂の左右の長廊の窓有る者」とする。

「別賞」…不詳。他とは異なる風雅な趣の意か。『佩文韻府』（巻 52 之 5）に李嶠詩「琴尊（樽）は別賞を留め、風景は離晨を惜しむ」を引く。

「瓊瑤觀」…玉のように美しい景色。「瓊瑤」は美しい帯玉。「観」は景色。

「冒雪」…雪に覆われる。

「不」…文末で疑問を表す。「否」に同じ。

③現代語訳

一本の木が休む間もなく風に揺られ、
旅人と馬の進む道は、はるか彼方にまで続いている。
美しく風雅な趣の内藤殿の御屋敷の景色は、
溜池の堤が雪に覆い尽くされることを知っていたであろうか。

［注］

注 1) 山田原欽の詩は、すべて山口県立山口図書館蔵『復軒詩藁』に拠る。

注 2) 山口県立山口図書館所蔵『復軒文蒿』に拠る。以下、山田原欽の文は全て同書に拠る。

注 3) 内藤家～八景詩」の 15 字は、「小亭夜雨」の題下に付された題注。

注 4) 国立国会図書館「デジタルコレクション」に拠る。

注 5) 財団法人東洋文庫所蔵「画像データベース」に拠る。

注 6) 「嘉会亭記」は、内藤紀州の邸内にあった家臣脇田正明の居について主人のために記したもの。冒頭に内藤邸のある溜池の様子を記す。「嘉会亭」と「小亭夜雨」の「小亭」との関係は、「嘉会亭記」に載せる八景の景物の配置（「愛宕之（秋）月」「三縁（増上寺）之晩鐘」「新橋之残照（夕照）」）が異なるため、同一ではないと考えられる。

注 7) 角川文庫『江戸名所図会』（角川書店 1967）に拠る。

注 8) 朝倉治彦校注解説『江戸名所記』（名著出版 1976）に拠る。

注 9) 修訂第二版第七刷（大修館書店 2007）

注 10) 逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局 1983）に拠る。

注 11) 東京市芝区役所『芝区誌 全』（1938）「第四篇地誌」1364 頁。

注 12) 『太陽コレクション　地図江戸・明治・現代』（平凡社 1996）特別付録。

注 13) 拙論『山田原欽「古畑別業記」訳注』（『至誠館大学研究紀要』第 7 巻 2020）参照。

注 14) 「第四篇　地誌」1417 頁。

※ 山田原欽の萩八景詩及び瀟湘八景詩は、拙論『山田原欽「萩八景」詩訳注』（『至誠館大学研究紀要』第 5 巻 2018）および『山田原欽「瀟湘八景詩」訳注』（『至誠館大学研究』第 6 巻 2019）を参照されたい。